

個性化を進め、特色ある教育で 競い合う関西の大学

▶ 新入生の多様化で生じた 導入教育が抱える課題に取り組む大学

一年次の導入教育に工夫を凝らす大学は多い。これは大学が多様な学生を受け入れる傾向が強くなるにつれ、大学の学習環境に適応できない新入生が増えていることによる。大阪府立大学、同志社大学の取り組みは、両校が抱える特有の課題に向き合っている点で共通する。

な課題だった。そこで同大学は、総合教育研究機構という部局を創設し、理系学部の新入生を対象に「入学生の学力把握のための数学基礎学力試験の実施」「再履修生に特化した授業の実施」「数学専用の質問受付室の設置」など多岐にわたる施策を推進している。

日本経済新聞

※転載承認済

平成二十年五月二十三日(金)

大学全入時代を迎え、大学教育は今、真の個性化を迫られている。各大学は特色ある教育を求めて検討を始め、実際にいくつかの大学では成果を出しつつある。大学教育の改善に資する種々の取り組みのうち、特色ある優れたものを文部科学省が毎年選定している。「特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)」である。2007年度には52件の取り組みが選定され、このうち8件が関西の大学のものだった。

大阪府立大学の「大学初年次 数学教育の再構築」は、数学という一科目の基礎教育に特化した導入教育としてユニークだ。数学科目は、理系学部はもとより、経済学部をはじめ社会科学系の学部でもその重要性は増している。にもかかわらず、一部の学生は求められる数学レベルに達しないまま入学し、専門科目の修得に支障をきたすケースが見受けられる。工学部、生命環境科学部、理学部など、理系学部にも多数の学生数を持つ同大学にとってもそれは大き